

『ここがヘンだよ日本人』で 描かれた女子高生のイメージ分析

金 鉉哲



▶ 1 はじめに

近代メディアは、常に少女や若い女性たちを特殊な形で描いてきた。その特殊な形は、二重性をもつ。まず「女」というフィルターを通した映し出し方である。たとえば、近代家父長制が生み出した「良妻賢母」等のジェンダー規範のような近代的「女らしさ」が強調される（小山，1991；瀬地山，1996）。そして未成熟者というイメージが付け加えられる。こうした少女たちのイメージは、近代メディアの発達につれ、さまざまな新しいイメージとして切り替えられてきたが、近代が生み出した少女へのまなざしの根本は変わっていない。今は、さまざまなメディアを通して、少女たちのイメージは多様な形で、人々の目に映し出されている。「女らしさ」と「子どもらしさ」を保った「少女らしさ」は、解消するどころか、ある意味ではその広がりを増しているようにもみえる。

メディア上では、大人たちはもちろん少女たち自らも「少女らしさ」を再生産していく担い手になる。それゆえ原因と結果との見分けがつかず、真実を直視することが非常に難しくなっている。つまり、彼女たちのもつ特性が本質的なものなのか、作られたものなのかという判断がつきにくい。こういった困難の中での「少女らしさ」の再生産は、今日、日常的にあるいはメディアで、数え切れないほど起こっている。小説やテレビでのドラマ等の中では、フィクションという形式によって、少女たちがイメージ化されるのに対して、少女雑誌やテレビのパラエティ番組等では、少女たちが直接自分を表現する場面も多いが、少女たちは結局語る側ではなく、語られる側に留まる。メディアは、常に誰かの味方になる。少なくとも少女たちの味方ではないのは確かであろう。自己表現の機会が増えつつあるにもかかわらず、結局「少女らしさ」の再生産は相変わらず行われている。

そこで、この論文では、テレビ番組で少女たちのイメージがどのように描かれているかを分析することによって、現代メディアが作り出している少女たちのイメージの特徴を明らかにし、その歴史上の反復性を確認したい。

まず、今日の少女のイメージがいかなる歴史性を持つのかを探る。そして、『ここがヘンだよ日本人』というバラエティ番組の内容を分析する。分析対象は、1998年10月～2002年3月に放送された『ここがヘンだよ日本人』の番組の中で、「女子高校生」をテーマとした放送内容に限定する。その一つが「ここがヘンだよ日本の女子高生」（1999年3月17日）である。このテーマでは2回放送されたが、そのうち2回目の放送（1999年4月28日）は親子関係が中心になっているので除外する。もう一つは「ここがヘンだよ日

本のファッション」(1999年11月24日)である。そのうち、「コギャル」をトピックスとして取り上げている部分のみを分析対象とする。分析対象となる内容は放送した全体的内容と比べてわずかなものである。実際、他の放送内容のなかにも、「女子高生のイメージ」と関連したところが多いが、ここでは「女子高生のイメージ」が重点的に映し出された放送内容のみを分析対象にする。しかし、ここでの女子高生イメージの映し方は、他の場合にも見られると判断される。

内容分析は二つの作業にわけて行う。まず、番組出演者同士のトークバトルの内容に対して、主要発言を取り出し、一つずつの発言をキーワード化し、それを再びコード化し、コード集を作る。最後にそれに基づいて女子高生のイメージマップを作り、番組のなかで描かれた女子高生のイメージの構図を把握する。次は、トークバトル以外のテロップやビデオ資料の内容と番組編成の特徴から生じる「否定的イメージ/肯定的イメージ」のコントラストの仕組みを分析する。そしてトークバトルの内容を含む番組全体の内容を抽象的イメージの対立軸を設定し、そこから生じるコントラストの仕組みを分析する。最後には、そうした分析を踏まえて、そのもつ少女イメージの歴史性との類似性を検討する。

▶ 2 近代メディアと少女のイメージ

Pillipe Arièsの研究(1962)とMargaret Meadの研究(1953)は、「子ども」期を過ごすというライフコースのあり方自体が、歴史的かつ社会的な産物であることを明らかにした。これは、おおむねどの国でも類似し、日本も例外ではない。日本の近代学校制度は、それぞれ異質な世界にあった子どもたちを、学校という均質な空間に一気に押し込み、「児童」という年齢カテゴリーに一括した。「子ども」は、近代国家を担う国民の育成をめざした義務教育の対象として、制度的に生み出されたのである。しかし、制度ができたからといって、「児童」という存在に対して、当時の人々がすぐさま、今日のわれわれもっているような<子ども>のイメージを抱いたわけではない。社会的・文化的な意味で「児童」という存在にある属性が付与され、近代的な「子ども」観が誕生するためには、学制という制度に加え、もうひとつ別の契機が必要であった。それが文学である(河原, 1998)。近代初期においては、文学の窓を通して人々のまなざしが子供に向けられるようになった。それは、柄谷行人のいう「風景」のようなものである。われわれが当たり前のこととして思っている絵画の「風景」といったものが、実は近代の産物であるように、「児童」も近代になって初めて発見された、と柄谷(1980)は言う。

河原によれば、日本で近代的「子ども」のイメージが人々に認知されるには、何より児童文学の役割が大事であった。ロマン主義的子ども観が明治末期の文学に端を発し、大正中期の「童話・童謡」運動が興される中、それまでなかった新しい「子ども」のイメージが生み出された(河原, 1998: 12)。それは無垢な「子ども」のイメージであり、文学上でのイメージである。しかし、この時期に、もうひとつのイメージが生まれてくる。それは不良少年少女のイメージである。このイメージは新聞や雑誌を通じて徐々に流布していった。こうして「子ども」のイメージは、無垢というイメージと不良というイメージが混じり合って、人々の印象に残り、やがて「大人」とは、完全に別種の存在としての「子ども」が生み出されたのである。

「少女」という言葉も同じように近代的なカテゴリーとして生まれてきた。それは、学校教育制度の発展、近代家族の興隆によって生まれてきた。「少女」に具体的なイメージを付与し、可視化したものは、都市の新中間層を中心とする大衆文化、とりわけ少女

雑誌での「少女イメージ」であった。都市の新中間層の生活様式が「理想の生活様式」として、階層を越えた大きな規範となっていた当時、新中間層の女子に幅広く読まれた少女雑誌の「少女イメージ」は大きな影響力をもっていた（今田，2002：185）。

大正のモボ・モガ時代から昭和に入ると、メディア上では、少女たちの不良行為に関する報道が目立つが、それは今日と同じように、時には不良の内容や範囲は曖昧であった。たとえば、「銀ぶら」（銀座をぶらつく）をする少女たちのことを、当時の新聞は、こう書いている。

……帰りの電車賃七銭だけ持って、ここに現れる女学生もいる。カレッジ・ボーイから『キミ、お茶、のまないッ』とモーションをかけられると、『ボク、……モチ、オーケー』とはかり……たらふく食べて、翌朝、学校で『七銭で豪遊しちゃった』と、友たちに威張ってしゃべる。（昭和9年4月19日付 東京日日新聞，秋山，1992：225）

少年少女の言動に対して警察の取り締まりの手が及ぶと、少女たちはこう反発する。酒や煙草をたしなむこと、映画を見ること、入墨をすることなどによって直接被害や迷惑をこうむる他人はいないではないか、ある種の大人たちは、十代のわれわれよりもはるかに悪らつな行為をしているのではないか、家出も自主性にもとづく行動なのだからほうっておいてくれ、と（秋山，1992：231）。今も馴染みのあるメディア上の風景のような、家出少女と係官とのやりとりを大正15年（1926年）8月19日付「大阪毎日新聞」は、こう書いている。

「なぜ干渉します？ 私は金を持っています。堂々と宿屋に泊まっています。これから職業を得て一個の人間として立派に働くのです。何も警察の手をわずらわすような悪いことは致しません」
「悪いことをするやつがあるから君らを保護するので」
「それは悪人だけを取り締まったらいいじゃありませんか」
「君らにもし男でも出来たら、善良な嫁さんにもなれないでしょう」
「私は、人妻となって束縛された生活をしたとは思いません。男もある程度なら出来たってかまわないと思います。私は、生きた社会に触れたくて出て来たのですから、とにかく放してください」
「しかし、君の家に照会したら、すぐ帰してくれといって旅費まで送ってきています」
「それは、私と私の家族との交渉にしてください。私は断じて帰りませんから」

こうした背景には、中産階級の広がりとともに、少女たちに小遣いが与えられるような社会変化あるいは近代家族での子どもの有り様の変化などがあった。これは、まさに戦後まもなく拍車をかけられた高度経済成長期を通じて、またその時期のテレビの普及によって、引き続く風景であろう。

少女たちは、ひたすら大人によって語られるばかりではなく、限られてはいたが雑誌の投稿欄のようなところで自らを語ることもある。しかし、彼女らの声で語るとはいえ、結局、彼女らは語られる立場に過ぎず、「少女」たちは批判を浴びる。日常生活の言葉づかい、品行、風俗まで、そして知識、とりわけ科学的知識に不足しているという批判もある（今田，2002：195）。

このように近代メディアは、少女のイメージを映し出してきた。ただし、半世紀以上のテレビ時代においては、少女のイメージは映像を通じてより強い印象を持たれるようになる。テレビの生々しさは、絶えず少女たちのイメージを産出し、その問題性を浮き彫りにする。そして「少女」のイメージが歴史の中から登場したことを完全に忘れさせ、それが常に眺められる当たり前の「風景」のように印象づけられる。

今日の「女子高生」のイメージは、まさにそのイメージを受け継いだイメージである。「女子高生」という「女性冠詞つき表現」（白石，2000：12）自体が強いインパクトを与

えている。それは「高校生」あるいは「男子高校生」という言葉が特に何のインパクトも持たないのと対照的である。「女」であることと、「高校生」であることが混じり合うことによって、そのインパクトが強まったのである。果たして今日のメディア上では「女子高生」がどのようなコードで語られているのだろうか。

▶ 3 「女子高生」のイメージマップ

ここでは、テレビ番組の『ここがヘンだよ日本人』で少女たちのイメージがどのように語られたか、イメージマップを作って把握する。このためにまず次のような作業をする。

出演者たちが語る話の中で、少女のイメージと関連する表現を抜き出し、そこからまたキーワードを抜き出す。次にそれぞれのキーワードを2段階(,)でコード化する。コード は、キーワードの属性を現す。たとえば、価値観、文化、特性など。コード は、キーワードの価値評価にあたるものである。たとえば、不良性、軽薄性、自己選択など。

それぞれの表現を 発言者が男性であるか(M)、女性であるか(F)、女子高生自らの発言であるか(S)、他者の発言であるか(O)、日本人の発言であるか(J)、外国人の発言であるか(Fo、ただ帰化した外国人パネラーはFo*)、肯定的な表現であるか(P)、否定的な表現であるか(N)によって区別する。また社会問題や家族問題に帰因(attribution)したり、あるいは一時的文化と見なしたりする発言(NS)はNとPとの間に位置づける。

こうして作ったのが、「女子高生イメージのコード集」(巻末資料参照)である。その中から の各分類コード別に分布をみると、表1のようになる。

表1からわかるように、否定的イメージと肯定的イメージの頻度はそれぞれ75と17である。そのほかに、その強度はともあれ、否定的イメージにおいて自己評価より他者による評価が多い。これは当然のことかもしれないが、肯定的イメージにおいても自己評価より他者による評価が多い。つまり、どちらにせよ、彼女たちは、語る立場というよりは語られる立場にあるのだ。男女別の頻度を見ると、否定的イメージにおいても、肯定的イメージにおいても男性の頻度が多い。これは全般的に男性の発言が多いことから、説明がつくが、それにしても否定的イメージより肯定的イメージの場合、女性の頻度が低いことが分かる。これは、女性自身が女子高生たちに対して肯定的イメージより否定

表1 否定的イメージと肯定的イメージのコード別頻度

否定的イメージ(N)	75	肯定的イメージ(P)	17
自己評価(S)	5	自己評価(S)	6
他者評価(O)	70	他者評価(O)	11
計	75	計	17
男性(M)	49	男性(M)	8
女性(F)	21	女性(F)	3
女性(F=S)	5	女性(F=S)	6
計	75	計	17
日本人(J)	16	日本人(J)	5
外国人(Fo)	52	外国人(Fo)	6
外国人(Fo*)	2	外国人(Fo*)	0
計	75	計	17

注) NSはNとカウントした。

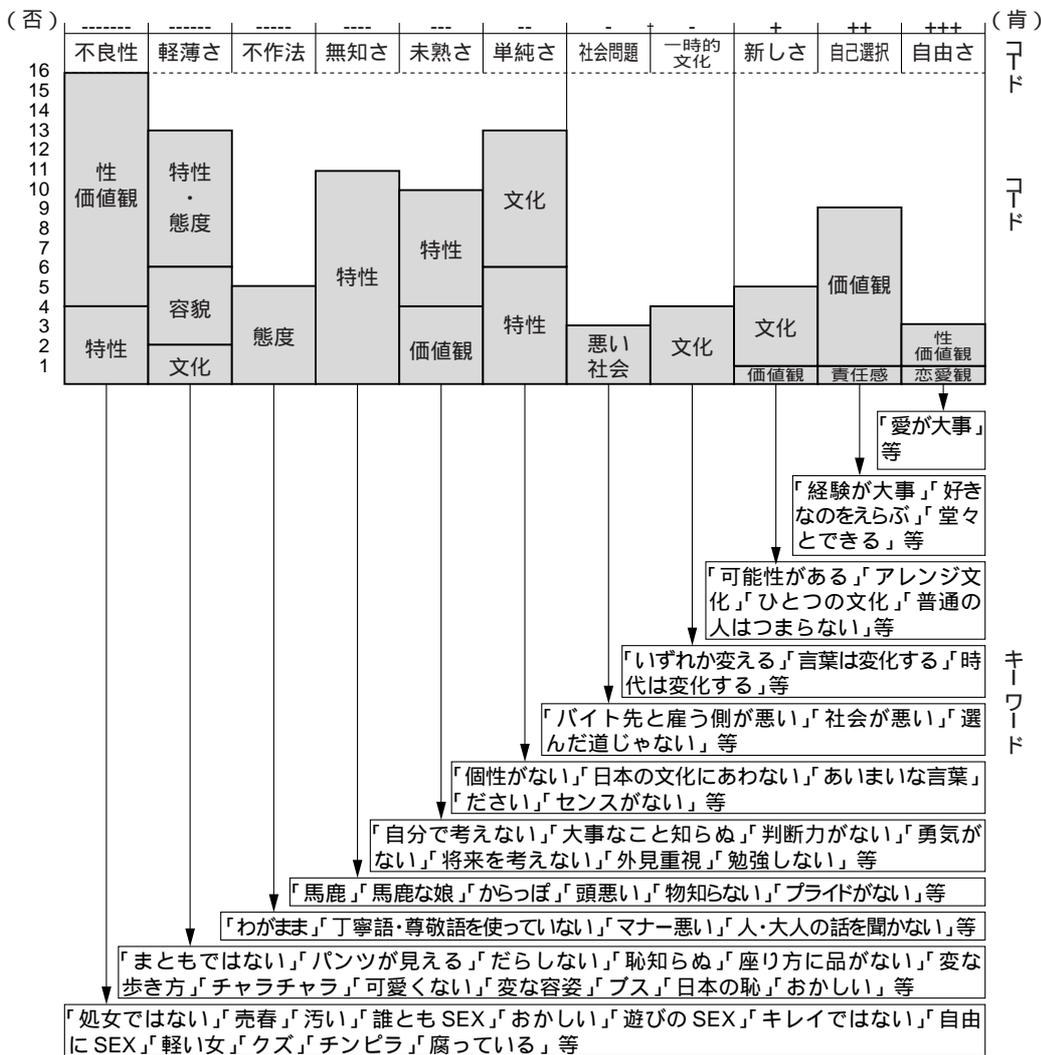
的イメージを持っていることを示唆している。そして日本人と外国人を比べると、外国人がより否定的イメージを持っていることがわかる。

番組の中で女子高生のイメージがどのような仕組みで現れているのかを、さらにイメージ化するために、「女子高生イメージのコード集」の内容をイメージ化して図1の「女子高生のイメージマップ」を作った。

図1に示されているのは、厳密な意味での統計的意味を持ってはいない。1~16の数値はコードの頻度を意味するが、これも厳密な意味での統計値ではない。また、否定的なイメージから肯定的イメージへのスペクトルも必ずしも連続性を持ってはいない。にもかかわらず、図1は、この番組で女子高生のイメージがどのような構図で語られたかを鮮やかに見せてくれる。

表1ですでにみた通り、図1は、女子高生のイメージは否定的なイメージが圧倒的に多いということを見せてくれる。これは、番組のテーマが日本の女子高校生の問題であるだけに、当然かもしれない。否定的なイメージとしては、「不良」、「軽薄」、「不作法」、「無知」、「未熟」、「単純」といった抽象的イメージが浮かび上がる。これと違って、「新

図1 女子高生のイメージマップ



しさ」、「自己選択」、「自由」といった肯定的イメージも映し出される。両者の中に、社会問題や一時的文化として表現されるイメージがあるが、これも結局女子高生に対する否定的イメージがベースになっていると思われる。

彼女たちの性に対する価値観や特性は、何より「不良」というイメージとして映し出される。特に性価値観と関連した「不良」のイメージが目立つ。「処女ではない」といった発言が、その「不良性」を最も端的に語ってくれる。女子高生の処女性を問うこの言葉にかなりの重荷がかかっている。引き続き「汚い」、「軽い」、「腐っている」ましては「売春」という言葉まで飛び込んでくる。そして彼女らの気質や態度、文化、容貌は、「軽薄」というイメージで語られる。「まともではない」軽薄な存在として。話し方、座り方、歩き方、メイク法なども軽薄である、と。不作法であり、無知で、未熟で、単純な特性の持ち主で、価値観も未熟であり、文化も軽薄かつ未熟である存在として語られる。さらに、たとえ、彼女たちの問題が社会問題として、あるいは一時的な文化現象として描かれる場合にも、それは、結局彼女たちに否定的イメージを与える。

時には、彼女たち自ら自分を否定してしまうが、彼女たちも大人たちの発言に対して、反発かつ激怒もする。一部の大人たちは、彼女たちの文化や価値観が新しいと、その文化の可能性や独自性を評価する。また、彼女らの自己選択が大事であり、彼女たちが責任感さえ持っているとも語る。彼女たちは自分が好きだから堂々とする、という価値観を持ち、アピールする。セックスに関しても、愛があるからセックスが正当化されるのではなく、セックスと愛は切り離せないものであると語る。このように彼女らが堂々と自分を表現するのに対して、肯定的な発言は、女性たちからはあまりなされず、むしろ男性から主になされる。これが全体的に男性の発言者が多いからかといえば、表1から分かるように、女性の場合、否定的イメージより肯定的イメージの頻度が低い。女性自ら強い性規範に縛られているのではないかという示唆が得られる。

しかし、図1で示した否定的イメージと肯定的イメージは数学的に加減かつ相殺することはできない。たとえば、7割が否定的で3割が肯定的であっても、それが相殺され4割の否定的な効果があるとは限らない。そこには、質の差が存在する。たとえば、通念に沿ったイメージ（ステレオタイプ）と逆イメージとの間にコントラストが生じ、逆イメージは陰の中に消えてしまう恐れがある。それは、おそらく番組編成の効果によってさらにエスカレートされるだろう。

▶ 4 女子高生イメージのコントラスト

ここでは、番組の中での女子高生のイメージのコントラストを分析する。確かに番組の中では否定的イメージばかりが映し出されているわけではない。図1から分かるように、映し出されるイメージはスペクトルのように多様である。しかし、そのスペクトルがそのまま人々にイメージ化されるとは限らず、番組全体を通して様々なイメージは、特定の方向へ吸い込まれ、結局特定のイメージのみが印象に残りかねない。

上記のイメージマップは、トークバトルの内容から取り出したものである。つまり、出演者たちによって語られたイメージである。しかしこの番組は、バラエティ番組の特徴として、トークバトル以外のイメージの伝達経路をもつ。それは、テロップやビデオ資料提示などの非発話的イメージ伝達記号である。それらの反復によって番組編集効果はさらにエスカレートする。たとえば、「オープニング」と「エンディング」は、全体に比べて5%前後の水準であるが（萩原，2003参照），そのインパクトは強い。もうひとつのバラエティ番組の一般的な特徴が、出演者の発言が字幕で映し出されることである。

これによって、伝わりにくい外国人の発言が明確になるが、これがさらにイメージ伝達のインパクトを増す。こうした発言以外の放送あるいは編集効果もイメージ伝達に重要なファクターに違いない。

そこで、この節では、番組編集効果とイメージの対立軸から生じうるイメージのコントラストを検討したい。イメージの対立軸としては「不良／自由」、「軽薄／闊達」、「成熟／未成熟」、「男／女」の四つの対立軸を取り上げる。つまり、否定的イメージと肯定的イメージとの対立とそのコントラストを検討することである。

4-1 番組編成によるコントラスト

番組は、おおむね「オープニング」「トークバトル」「エンディング」という流れで構成されている。その間に、テロップやビデオ資料が押し入れられる。この中で、特に「オープニング」、「テロップ」や「ビデオ資料」は否定的イメージを強化する役割を果たす。

「女子高生」をテーマとした放送では、女子高生たちが登場する前に編集された出演者の主要な発言が流される。たとえば、「勉強していればいい」、「個性探せば」、「クズにしか見えない」、「日本の恥」といった発言である。これらのシーンによって、最初から否定的なイメージに対する強いインパクトが与えられる。女子高生たちの問題性が凝縮的に伝えられ、トークバトルの中で繰り返されるのである。

女子高生たちの性生活を聞くビデオ資料には、保守的傾向の強い外国人がレポーターとして出演し、さらに否定的イメージの効果をあげる。女子高生たちの性経験の話聞き、びっくりするレポーターと笑いながら堂々と処女ではないことを語る女子高生たちが映し出される。女子高生たちはあまり真剣ではないようで、外国人の反応を楽しむようにも見えるが、彼女たちは、セックスの初経験は中1がピークだとか、そういうのが今の時代では自然なことだ、と堂々と語る。これを裏付けでもするように、引き続きテロップで、ある雑誌に載った「男性は18歳がピーク、女性は16歳がピーク」という初体験の年齢調査結果をグラフを通じて表す。

このほかに、「女子高生がセックスするのは許せない!」、「結婚する前にセックスしてはいけない」、「女子高生がセックスするのはへんですか?」、「女子高生よりわれわれの方がきちんとした日本語を話せる」といったテロップが映し出されるが、これらもすべて女子高生の否定的なイメージを強化する。

いくら彼女たちが自分の立場を主張しようとしても、番組全体はすでに否定的なイメージで塗り替える仕組みになっているのである。つまり、番組自体が、否定的イメージを鮮やかに浮き彫りにする強いコントラストを生じさせるように編成されているのである。

4-2 「不良／自由」というコントラスト

図1に示したように、女子高生の否定的なイメージのなかで極端なイメージと思われるのが「不良」のイメージである。このイメージと、真っ向に位置するイメージが「自由」というイメージである。しかしこの二つのイメージはコインの裏表のようなものである。「不良」というイメージは同時に「自由」というイメージでもある。女子高生たちが「自由」という感覚で言っているのが、「不良」として解釈されたり、「自由」とも解釈できるものがすでに「不良」というイメージで決め付けられたりするのである。彼女たちの「自分が選んだ道」、「好きなこと」というのが、まるごと「不良な行為」と見なされがちである。特に性に関する意識の差が、コントラストを拡大させる。

「セックスをしたり、スカートを短くしたり、髪の毛を染めたりするのは間違い。キ

レイな女の子は結婚前にセックスしなかった人」(ベナン男性)、「男性とすぐセックスしちゃうと、軽い女だと思われちゃう」(テリー伊藤)等の発言に対して、「その中で愛が生まれればいいと思う」というような恋愛観の違い、自由な感覚は、議論されず、それは、性に関する強い規範によって感じ取りにくくなる。仮に彼女たちの行為や価値観に問題があったとしても、彼女たちの持つ良さというのは、まるきり「不良」という領域に吸い込まれてしまうのである。

4-3 「軽薄／闊達」というコントラスト

彼女たちを肯定的に評価する人もいるが、ほとんどの出演者たちが彼女たちを責め続ける。にもかかわらず、彼女たちは比較的冷めている。反発もするが、彼女たち特有の闊達さを失わない。彼女たちは堂々と相手を説得しようとする。彼女たちは、一貫して闊達さを見せており、素直でもある。彼女たちの表情や語り方には硬直さも見られない。しかしこのような闊達さは、すべて軽薄さに置き換えられる。

たとえば、大人たちは、彼女たちに言う。

「大人が話しているからちゃんと聞きなさい」(ナイジェリア男性)

「最初から誰かが話している間、女子高生たちはばかにして聞いていない。集中して聞いた方がよい」(KONISHIKI)

しかし、大人たちも彼女らの話を真面目に受け取らない。はじめからお互いに真面目に話せる雰囲気ができあがっていない。お互いに真面目に話す気がない。たとえば、

「カレシ、恋人、愛のあるセックスしかしたことないもん」

という女子高生の発言に信じられないというような表情で聞き返す。

「本当ですか」(ナイジェリア男性)

大人たちは最初から彼女たちを信じようとしないのである。

「勉強していないと言うが、この中にも陰で一生懸命やっている子はいると思う」

という女子高生に対して、

「うそつくな！」(アメリカ男性)

と返事するなど、不信の雰囲気を先に作り出すのは、大人の方である。

「セックスはいつもどこでしているのか？」(イラク男性)

と聞かれ、

「家に決まってるじゃん」と女子高生が答えると、

「違うでしょ。カラオケ、109のお手洗い、駅のお手洗い、洗面所、やめよう」

と決め付ける。これが彼女たちの反発を買うが、それにしても、彼女たちは明るい。しかしこのように明るさ、闊達さをみせるのが、彼女たちに決して良い印象を残してはいない。それらすべてが「軽薄さ」とのコントラストによって、見えにくくなってしまっている。

4-4 「成熟／未成熟」というコントラスト

トークバトルの中に埋め込まれているもう一つの対立軸は「成熟／未成熟」という対立軸である。つまり、基本的には「大人／子ども」という軸である。トークバトルは、こうした成熟した大人と未成熟の女子高生たちの口争いのようにみえる。しかし「成熟／未成熟」という対立は、実在するというより、そういう前提や信念が先立って存在すると言った方がよいだろう。それゆえ日常の大人と子どもの会話で見られるような風景、つまり、「説教と反発」という会話が交わされている。大人たちの説教ぶりの発言が続く。それに対して、彼女たちは自ら「未熟さ」をあらわす。

「高校を卒業したら今の髪型や服装ができないのは分かるでしょ」(大槻ケンヂ)という、

「わかんない」と答える。

「今チャラチャラ生きていて、母親になったとき自分たちの子供を教育できるのか、何を教えられるのか」(ナイジェリア男性)と聞くと、

「サーフィン」と答えてしまう。

こうして不真面目に答えることによって、未成熟であるイメージが強化される。そういう反応は確かに大人たちの発言のトーンによって違ってくる。彼女たちは、大人たちの穏やかな発言に対しては、

「個性がないってわかってる」

「バカみたいだと思ってる」

「ちゃんと教えてくれれば聞き入れることもある、自分にすごく必要なことは吸収したいと思っているから」

と答える。

ある意味で、彼女たちは大人たちの前で自ら「未熟さ」を演出する。しかしこういうことが「未成熟な存在」として決め付ける方向に作動するのである。コミュニケーションの相手というより説教の役割を演じる大人としての発言によって、「成熟/未熟」という格差が強化されるのである。

4-5 「男/女」というコントラスト

「不良」、「軽薄」、「未成熟」といったものは、彼女たちが女性であるからこそ、さらに浮き彫りにされる。単に子どもであるのではなく、「女」としての子どもなのである。たとえば、単に「結婚する前にセックスしてはいけない」という発言のなかにも、特に「女が」という言葉が、見えざる括弧の中に潜んでいるような印象を与えられる。常にそういう連想を引き起こす文脈がトークバトルの底に流れているのだ。「女子高生がセックスするのはへんですか?」というテロップも、「皆さんも処女じゃないですか」と聞く時も、そして女子高生に限ってこういうテーマがあげられたこと、すべてが「男/女」という対立軸から、より鮮やかにかつ当然のこのように見えてくる。

「こちらからパンツが見える」(韓国女性)

「座り方がだらしないのは確かだ」(テリー伊藤)

「座り方に品がない。女性には品が一番大事」(フィリピン女性)

という発言は、男性のみならず、女性からも飛び込んでくる。そのだらしない座り方を見せ付けるかのように、彼女たちに向かうカメラは、ひんぱんに彼女たちのスカートの平行線あるいは下を走る。

さらに「個性で打開してほしい」、「自分の個性を探せば」というときにさえ、「個性」というのは、「女らしさ」を前提とするのである。せいぜいのところ「女」としての「個性」をもつことである。つまり、可愛くかつきれいになることが、ここで語られる「個性」というものではないか。

結局、「不良」、「軽薄」、「未成熟」といったものすべては、「女らしさ」の欠如と結びつけられるのである。

▶ 5 おわりに

今田(2001)によると、それまで少女たちから親への献身的な孝が求められてきたが、明治末から大正末にかけて、親の近代的愛情を根拠にした少女から親への献身へと変化していき、昭和の初めごろから、親から少女への見返りを求めない献身という近代的愛

情で結ばれた関係となる。そして昭和の少女たちは自由を謳歌し、自己実現を追求するものとして語られるようになり、これは当時の女子教育論が理想として掲げていた良妻賢母とは大きくかけ離れた少女像の登場を意味するが、そこから生まれてきた新しい主体化は家族内の愛情関係を媒介にして国民国家によって回収された、という。このように、時代によって少女のイメージは変わってきたかもしれない。近代メディア上の少女たちのイメージも常にその形を変えてきたかもしれない。しかしその根本は変わりなく、再生産されてきた。少女たちは、「女」という「不完全さ」と「若い女」という「未熟さ」を常に背負いながら少女の歴史を繰り返してきた。秋山は、昭和の少女たちを「未熟な大人」、平成の少女たちを「早熟な子供」と称している。としながら、平成元年の一人の少女は、昭和元年の一人の少女をそっくりそのままコピーしたようなもの、つまり、本質的に同じものだ、という（秋山、1992：263）。しかし、果たして少女たちの歴史の反復は、その本質の反復として読むことができるものなのか。

テレビのパラエティ番組での「少女」、「女子高生」のイメージは比喻でも、フィクションでもなく、現実として生々しく伝えられている。しかし彼女たちのテレビ出演は、ある意味では陥穽でもある。彼女たちは大人たちの前で、特有の闊達さを堂々と見せもするが、結局窮地に立たされる。特有の闊達ささえ軽薄さにされてしまい、窮地に立たされた彼女たちの過剰な反応は、また未熟さを感じさせてしまう。こういった循環は、今の時代においてより起こりやすいといわざるを得ない。少女たちのイメージは、常に変わってきたようで、歴史の渦巻きの中を回転するばかりである。そういう意味で確かに歴史は反復する。しかし単純な歴史の繰り返しではない。つまり、いつも少女たちはそうであるとか、あるいは大人との間には常に葛藤があるとか、という本質の単純な反復ではない。裏面では、語る側と語られる側との不公平な関係が反復されるばかりである。メディアは、大人たちの所有物であり、宣伝道具であるからだ。メディア上の少女たちはエキストラにすぎず、決して語る側ではなく、語られる側である。そこには道徳的で、理性的な大人の像が前提としておかれている。

番組で描かれた女子高生のイメージは、単なる墮落した時代の「少女像」にすぎないかもしれないが、少女たちの自由な感覚は「親密性」の変容（ギデンス、1995）を図るアバンギャルド的なものかもしれない。その価値判断は、世間の倫理で判断されるべきものではなく、より開いた公論の場で熟させる必要がある。確かに、彼女たちの持つ価値観は、メディアでは、まだ真剣に論じられていない。それを評価し、それを裁くものさしは、まだ大人たちが握っており、その意味でメディアの属性は、男性であり、大人であるといわざるを得ない。

引用文献

- 秋山正美（1992）『少女たちの昭和史』、新潮社。
 Ariès, Philippe. (1962) *Centuries of childhood: a social history of family life*, New York: Vintage Books.
 ギデンス・アンソニー、松尾精文、松川昭子訳（1995）『親密性の変容: 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』、而立書房。
 萩原滋（2003）『ここがヘンだよ日本人』: 分析枠組と番組の特質、『メディア・コミュニケーション』、53、5-27。
 今田絵里香（2001）「近代家族と「少女」の国民化」 少女雑誌『少女の友』分析から、『教育社会学研究』、68、225-242。
 今田絵里香（2002）「少女雑誌における「少女ネットワーク」の成立と解体 1931～1945年の少女雑誌投稿欄分析を中心に」、『教育社会学研究』、70、185-201。
 白石義朗（2000）『メディアと情報変える現代社会』 メディアと情報化の過去、現在、未来、九州大学出版会。
 柄谷行人（1980）『日本近代文学の起源』、講談社。
 河原和枝（1998）『子ども観の近代』 『赤い鳥』と「童心」の理想、中央公論社。

小山静子 (1991) 『良妻賢母という規範』, 勁草書房。

Mead, Margaret (1953) *Coming of age in Samoa: a psychological study of primitive youth for Western civilization*, New York: Random House.

瀬地山角 (1996) 『東アジアの家父長制: ジェンダーの比較社会学』, 勁草書房。

(金鉉哲 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員)

資料 女子高生イメージのコード集

少女のイメージを表す主要表現	キーワード	コード	コード	M/F	S/O	J/F	N/P/NS
処女じゃないの	処女ではない	性価値観	不良性	F	S	J	N
処女じゃないか	処女ではない	性価値観	不良性	F	O	Fo	N
売春	売春	性価値観	不良性	F	O	Fo	N
売春婦と同じ	売春	性価値観	不良性	M	O	Fo	N
SEX する場所: カラオケ, 109のお手洗い, 駅のお手洗い, 洗面所	汚い	性価値観	不良性	M	O	Fo	N
明日は誰とSEX?	誰ともSEX	性価値観	不良性	M	O	Fo	N
15歳で彼氏とやるのもおかしい	おかしい	性価値観	不良性	M	O	Fo	N
「(SEXは)そんな遊びじゃない」「SEXを遊びだと思っているのか」	SEXは遊びではない	性価値観	不良性	M	O	Fo	N
汚い経験	汚い	性価値観	不良性	F	S	J	N
SEXをしたり, スカートを短くしたり, 髪の毛を染めたりするのは間違い。キレイな女の子は結婚前にSEXしなかった人。	キレイではない	性価値観	不良性	M	O	J	N
「自由にSEXしたいと言っている」「日本は人間と動物の差がなくなる」	自由にSEX	性価値観	不良性	M	O	Fo	N
男性とすぐSEXしちゃうと, 軽い女だと思われちゃう。	軽い女	性価値観	不良性	M	O	J	N
クズ	クズ	特性	不良性	M	O	Fo	N
チンピラ	チンピラ	特性	不良性	M	O	Fo	N
チンピラ	チンピラ	特性	不良性	M	O	Fo	N
根っこから腐っているから	腐っている	特性	不良性	M	O	Fo	N
もっとまともにも考えたほうがいい	まともではない	態度	軽薄さ	M	O	Fo	N
パンツが見える	パンツが見える	態度	軽薄さ	F	O	Fo	N
座り方がだらしない	だらしない	態度	軽薄さ	M	O	Fo	N
「公の場で何人とやった」とか, 自分にとって大切な思い出だったら言えないと思う	恥知らぬ	態度	軽薄さ	F	O	J	N
座り方に品がない。女性には品が一番大事	座り方に品がない	態度	軽薄さ	M	O	Fo*	N
その(厚底)靴のせいで歩き方へた	変な歩き方	態度	軽薄さ	F	O	Fo	N
チャラチャラ生きていて	チャラチャラ	特性	軽薄さ	M	O	Fo	N
可愛くない	可愛くない	容貌	軽薄さ	F	O	J	N
アフリカ人になりたいと言っているのに, 髪が白いは変。自分に合ったようにすべき	変な容貌	容貌	軽薄さ	M	O	Fo	N
せっかく日本人に生まれたのに似合わないファッションするのは変	変な容貌	容貌	軽薄さ	M	O	Fo	N
ブスだから顔ももっと不細工になってる	ブス	容貌	軽薄さ	M	O	Fo	N
「外国を真似してはいけない」「日本の恥」	外国真似, 日本の恥	文化	軽薄さ	M	O	Fo	N
なんで16歳でグッチに憧れるのか信じられない, おかしい	おかしい	文化	軽薄さ	F	O	Fo	N
わがまま	わがまま	態度	不作法	M	O	J	N
一回も丁寧語・尊敬語を使っていない	丁寧語・尊敬語を使っていない	態度	不作法	F	O	Fo	N
大人が話しているんだからちゃんと聞きなさい	大人の話をかかない	態度	不作法	M	O	Fo	N
女子高生たちはばかにして聞いていない。集中して聞いた方がよい	人の話を聞かない	態度	不作法	M	O	Fo*	N
マナー悪い。歩き方, 座り方, パンツ見えてる	マナー悪い, パンツ見えてる	態度	不作法	F	O	Fo	N
あなた達が馬鹿だ	馬鹿	特性	無知さ	M	O	Fo	N
あなたたちのような馬鹿な娘はいらない	馬鹿な娘	特性	無知さ	F	O	Fo	N
バカヤロ	バカヤロ	特性	無知さ	M	O	J	N
バカ	馬鹿	特性	無知さ	F	O	Fo	N
バカらしい子供が多い	バカらしい	特性	無知さ	M	O	Fo	N
バカみたいだと思ってる	バカみたい	特性	無知さ	F	S	J	N
単なるバカ	単なる馬鹿	特性	無知さ	M	O	Fo	N
顔がアフリカ, 頭がヨーロッパ, 体は日本, 内面はからっぽ	からっぽ	特性	無知さ	M	O	Fo	N

少女のイメージを表す主要表現	キーワード	コード	コード	M/F	S/O	J/F	N/P/NS
頭悪いもん	頭悪い	特性	無知さ	M	O	Fo	N
どういふうに座れば綺麗ななんて知らない	物知らない	特性	無知さ	F	S	J	N
プライドがない	プライドがない	特性	無知さ	F	O	Fo	N
被害者意識を持つな。自分で考えるもんだ	自分で考えない	特性	無知さ	F	O	J	N
一番大事なことは何か、全部忘れてる	大事なことが知らぬ	特性	未熟さ	M	O	Fo	N
言葉が短い。考えが深くない	考えが未熟	特性	未熟さ	F	O	J	N
彼女たちには無理	判断力がない	特性	未熟さ	M	O	Fo	N
「自分で物を考える勇気がない」「不安だから皆と同じラルフローレンじゃだめ」	勇気がない	特性	未熟さ	M	O	J	N
将来があるからこそ今しっかりしなきゃいけないのが、わからないのか	将来を考えない	特性	未熟さ	M	O	Fo	N
外見をマネするのはなく、内面からアフリカ人になればいい	外見重視	価値観	未熟さ	M	O	Fo	N
高校時代におしゃれは必要ない。勉強してればいい	勉強しない	価値観	未熟さ	M	O	Fo	N
時間を大切にしないで勉強しないのか。バカな時間をバカな物にかけている	無謀な時間	価値観	未熟さ	M	O	Fo	N
高校生はブランドを持つべきではなく、バイトをしたら英会話を習ったりすべき	勉強よりバイト優先	価値観	未熟さ	M	O	Fo	N
個性を探せば	個性がない	特性	未熟さ	F	O	Fo	N
個性がないってわかってる	個性がない	特性	単純さ	F	S	J	N
顔の区別がつかない	個性がない	特性	単純さ	F	O	Fo	N
ファッションが標準化している	個性がない	特性	単純さ	M	O	Fo	N
みんなやってるからやってるだけ	個性がない	特性	単純さ	M	O	J	N
個性で打破してほしい	個性がない	特性	単純さ	F	O	J	N
日本の文化にあなたのやっていることは合わない	日本文化に合わない	文化	単純さ	M	O	Fo	N
(若者の)新しい言葉はあいまい	あいまいな言葉	文化	単純さ	M	O	Fo	N
言葉は生きていて時代によって変わるが、基本がある	言葉には基本がある	文化	単純さ	F	O	Fo	N
1番の人が「ワールド」という言葉を使ったが非常に危険	危険な言葉	文化	単純さ	M	O	J	N
その化粧によって中身の良さが出ない	中身の良さが出ない	文化	単純さ	F	O	J	N
ダサい	ダサい	文化	単純さ	F	O	Fo	N
センスは良くない	センスがない	文化	単純さ	M	O	J	N
バイトをする高校生を責められない。雇う場所が悪い。どうい居酒屋が高校生を雇うのか。日本人は考えた方がいい	バイト先と雇う側が悪い	悪い社会	社会問題	F	O	Fo	NS
こういう高校生を作った社会は悪い	社会が悪い	悪い社会	社会問題	M	O	Fo	NS
彼女たちが選んだ道じゃない	選んだ道じゃない	悪い社会	社会問題	M	O	Fo	NS
日本には高校卒業後、ライフスタイルを変えるという文化がある	いずれか変える	文化	問題の一時性	M	O	J	NS
私たちは彼女達の喋っている言葉を勉強した方がいい。言葉は変化する	言葉は変化する	文化	問題の一時性	M	O	Fo	NS
いいじゃないか、どうせそのうちなくなるんだから	いずれかなくなる	文化	問題の一時性	M	O	J	NS
時代が変わったから仕方がない	時代は変化する	文化	問題の一時性	M	O	Fo	NS
「チョー」には我々の想像以上のことが含まれている可能性がある	「チョー」には可能性がある	文化	新しさ	M	O	J	P
日本風にアレンジしているんだ	アレンジ文化	文化	新しさ	M	O	J	P
日本の若者ファッションは世界一	ファッションのすごさ	文化	新しさ	M	O	J	P
ひとつの文化であることを認めるべき	ひとつの文化	文化	新しさ	M	O	Fo	P
似合う、似合わないは人が決めることじゃない。それに普通の人はずまらないんです	普通の人はずまらない	価値観	新しさ	F	O	Fo	P
いろいろな事をしてやりたいことを決める時代	経験が大事	価値観	自己選択	M	O	Fo	P
不安だからではなく好きだから	好きだから	価値観	自己選択	F	S	J	P
彼女たちが選んだ	彼女たちが選んだ	価値観	自己選択	M	O	Fo	P
後悔していないから、堂々とできる	堂々とできる	価値観	自己選択	F	S	J	P
彼女たちの自己主張	自己主張	価値観	自己選択	M	O	J	P
今はこれが可愛い	可愛い	価値観	自己選択	F	S	J	P
可愛くないって皆言うけれど、私は自分の好きなようにしてるギャル、可愛いと思う	自分の好きなよう	価値観	自己選択	F	S	J	P
皆と同じようにこの子たちも好きな格好してるだけ	好きな格好	価値観	自己選択	F	O	J	P
「彼女達はちゃんと卒業する」	ちゃんと卒業する	責任感	自己選択	F	O	Fo	P
その中で愛が生まれればいいと思う	愛が大事	恋愛観	自由さ	F	S	J	P
処女じゃない	処女ではない	性価値観	自由さ	F	S	J	P
異性とSEXしたくなるのは人間の本能的欲求	SEXは本能	性価値観	自由さ	M	O	Fo	P